

訂正記事

【訂正】文学における焼身自殺—デリーロと目取真の自死のかわし方—

[常葉大学大学院国際言語文化研究科 研究紀要. 創刊号, 2020]

【Corrigendum】Self-immolation in Literature

: Suicidal Exchange Between Delillo and Medoruma

[Bulletin of the Graduate School of International Language and Culture,
Tokoha University Vol.1,2020]

小 池 理 恵

「常葉大学大学院国際言語文化研究科 研究紀要」創刊号（2020 刊行）に発表した「文学における焼身自殺—デリーロと目取真の自死のかわし方—」において、一部不適切と思われる引用箇所がありましたので、お詫びして訂正いたします。

記

訂正箇所

創刊号2頁3行目「希望」以下「チビチリガマ荒らし事件である。」までをすべて削除したうえで、以下の通り訂正する。

正

ウェブ上で公開された Rabson の翻訳とハワイ大学から出版された翻訳を比較してみると、翻訳者が目取真の視点の移行に苦労した様子が伺える。主語が大きな役割を果たす英語に翻訳するためには、目取真のこの視点の移行についていかなければならない。敢えて主語を使わないことにより、いったい誰の思いなのか、誰が行動主なのか、母語読者でさえわからなくなってしまう。まるで読者自身が主人公になったような気にさえなる。翻訳者泣かせであり、時に母語読者泣かせでもあると言える。これが芥川賞受賞（1997 年）作家、目取真の表現力ともいえるのだろう。筆者と同様、英訳との読み比べでその視点の移行について確認する読者もいるだろう。

一方、大野は自身の書評（同じ書評を三度世に出したことになる。「希望」の書評の中でも教科書のような位置づけであるが、本稿では、彼の遺稿集に再録されたものから引用している）の中で、「特殊な視点の構造」（大野 216）と指摘している。「希望」をオリジナルの朝日新聞掲載時（1999 年 6 月）ではなく、〈掌篇小説〉（276）として分類された上で、『沖縄 / 草の声・根の意志』（2001, 287-290）に再録されたものをエッセーから通読する形で読んだ読者にとっては、「特殊な視点の構造」は更に効果を発揮する。大野もその一人であり、小説集ではなくエッセーが中心であることに敢えて触れた上で、以下のように述べている。

作品はまず二人称客観小説のように始められるのだが、いつのまにか犯人の視点に移行し、結末では再び当事者を客観視する視点へと戻る。この境界がはっきりしない二重の視点の上に、エッセーを通読した上でこの作品に至った読者にはある奇妙な感覚が宿る。犯人の主張はどこかで読んだことがあるのだ。まさに犯人を犯行へと駆り立てる衝動、「お行儀のいいデモをやってお茶を濁すだけのおとなしい民族」「軍用地料だの補助金だの基地がひり落とす糞の様な金に群がる蛆虫のような沖縄人」という趣旨は既に前半のエッセーで主張されている内容なのである。ただエッセーでは不屈の闘争といった抽象的な言い方が作品では「最低の方法だけが有効なのだ」すなわちテロという具体的な形を与えられているということになる。(216)

米兵の幼児を殺害するという「テロ」行為については、フィクションでありながらも賛否分かれるところだが「最低の方法だけが有効」(希望 289)とする主人公のことに、読者は目取真の「テロ」の条件付き容認という姿勢を読み取ることができる。その条件が焼身自殺である。本稿では、目取真とデリーロに共通する視点として、社会の変えることが難しい意思決定システムと捉え、そのシステムに抗う手段としての焼身自殺に焦点を当ててみることにする。

ウチナアンチュとしての文化的連帯感がありながらも、政治的連帯感を求めることが時代遅れになり、連帯よりも個人中心になりつつあることの一例と捉えることができるのが、沖縄の若者たちによる「チビチリガマ荒らし事件」である。

以上